

学校
法人 内丸学園
盛岡幼稚園

園報

第 246 号
(9月)
2018

砂場遊びから育つもの

盛岡幼稚園 理事長 坂本 洋

熱中症を気遣う猛暑も落ち着き、園庭ではそれぞれの想いを込めた遊びの姿が見られます。特に砂場での遊びが盛んです。テーブルに砂を運びセットを使いままと遊び、容器の型ぬきをケーキやプリンに見立てて、「これどうぞ」「めしあがれ」。砂場のまんなかでは年中さん数名が穴を掘ったり、お山を作ったり。会話しながらもどちらが大きいか競い合っており

ます。幼稚園での学びは、環境を通して子ども達の主体的な遊びが基本です。その環境のひとつが、園庭にある砂場です。かつて幼稚園設置基準には、砂場やブランコ、滑り台は必置遊具設備でしたが、平

成17年に改正され必置ではなくなりましたが、私どもは園児に必要な遊びの環境として大事にしております。

当園の園内研修でも砂場遊びの子ども達の活動記録から、遊びがどのように発展し、どんな学びや育ちに影響しているかを発表しあ

います。さて、この夏に私ども全日本私立幼稚園幼児教育研究機構が主催する、幼児教育実践学会が東京家政大学を会場に開催され、当職も久々に参加してきました。基調講演もさることながら、数ある口頭発表の部の中で、「砂場遊び研究から見られる幼児の育ちと環境に

ついて」をじっくりと拝聴するこ

とが出来ました。この研究は、幼児教育研究機構が全国の幼稚園の砂場遊び状況を動画として収集したものを、それぞれの研究者が自身の課題を設定し縦断的に分析しておるもので、本年は、平林祥氏

(研究機構研修委員) が、砂場で見られる科学・数量形に関する子どもの育ちの可能性。箕輪潤子氏(武蔵野大学准教授) 人とのかわりにおける協働性(一緒にすること・分担すること) についての育ち。中橋美穂氏(大阪教育大学准教授) 保育者は5歳児の育ちをどの様に見ているのかく個の育ちを視点としてゝの発表があり、非常に興味深く充実した内容で、今後の保育者がかわる子ども達の視点、環境構成、予想される学びの計画等に参考となるものでした。

その中でも、平林氏の砂場におけるドロ団子作り活動の分析は、砂場の物とのかかわりの中で、幼児期の科学性の芽生え、育ちを捉えられること。新指導要領でも、数量や図形、標識や文字などへの関心・興味が挙げられておりますが、遊びの中で数える、簡単な

数字、形(丸、三角、四角)、そ

して自然に分類、比較、対応を、ドロ団子を揃える、並べ替える、比較する、順番を付ける等の活動として、数的な概念と技能の発達の機会となっています。また数的用語として、大きい・小さい、長い・短い、重い・軽い、より多い・より少ないを色々な活動場面を紹介し、言葉表現として、幼児期における数的感覚の育ちとして指摘。

結論的に、砂場遊びの中で科学性の芽生えや数的感覚の育ちはみられます。またその育ちには適切な環境を整えるだけでなく、育ちを見とり、適切にかかわる保育者の存在が最も重要ではないかと示唆しておりました。

改めて、ロバート・フルガムの著作「人生における必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」を思い出し、人としての生き方の基本、知恵を学ぶ機会、幼児期における主体的な遊びの中にあることを痛感しております。



「じじばを育む」

園長 坂本 信行

大人の関わりが必要

子どもの話せることばの数は、生まれて一年は何も話せませんが、一歳のお誕生日頃になるとマンマとかブー等と二、三語話せるようになり、二歳で約二百語、五歳で約二千語と急激に増えてきます。これはとても奇跡的な出来事なのですが、しかし、この事は黙っていても自然に身につけていくものではありません。周りの大人の関わりがあって可能になるものです。このことは、身体が食べて寝て、適当に運動していれば自然に成長していくような「成熟」とは異なり、ことばの発達には、人の関わりつまり「学習」が必要なのです。

例えば、一歳前の乳児は意味のある言葉をまだ話せません。赤ちゃんは、泣いたり喃語を発したりして自分の思いを伝えますが、その時、今、何をしてもらいたいのか、何を訴えようとしているのか

を推し量り、泣いて訴えたことに対して言葉にして話しかけてあげることが大事です。子どもはその語りかけられた言葉が分からなくても、訴えを取り除いてくれた行為とことばとが結び付き、体で覚えていきます。それがことばの始まりで、子どもの気持ちと世話をしてくれる大人の気持ちを通じ合っている、言葉が生まれてくると言われています。

本園は認定こども園となり、乳児から子どもを預かっています。心やことばの望ましい発達の面から、非常に大事な乳幼児期に関わっていることになり、そのことを職員一同心してお預かりしています。

なむなむしている

八月十日のBクラスポータルサイト通信に次のようなエピソードを紹介されていました。

給食の終わりごろ、「せんせー！このみどりの虫なにー？」と聞か

れた。「ギンバエだよ」と教えると、囲んでじっと見つめる子ども達。そのうち、女の子が「いま、手をこらやっていた！（ハエは時々、手をスリスリしますよね）なむなむつてやっていた！」と言うと、「きつとなかまのハエがしんじやったから、なむなむしてたんじやない？」と男の子がポツリ。小さな虫を見つめながら出てくる子ども達の言葉にほっこりした瞬間でした。

私はこの記事を読んで、子どもと保育教諭のやりとり、他の子ども達とのやり取りを興味深く読ませていただいた。ギンバエが手をスリスリしているしぐさを「なむなむつてやっていた！」と言い、それに対して他の子どもが「きつとなかまのハエがしんじやったから、なむなむしてたんじやない？」と、表現しています。

生活全体を通して応答的対応

このように、子どもが観察し、その様子を言葉やジェスチャーで表現したことに対して、保育教諭が応答し、更にこれに感動し、他の子ども達に広げています。保育教諭の応答的対応や感動そのものが、他の子ども達を刺激し、子ども

も達の観察眼や豊かな言葉、いきなことばの醸成につながっています。みんなで（集団で）学び合うことのおよさです。今回の事例は、教師が意図的に仕組んだやりとりではなく、日常に起こった一こまでのやりとりです。幼児期のことばの指導は、生活全体を通して応答的に行うことが大事であると言われています。

小林一茶の句に「やれ打つな 蠅が手をする足をする」の俳句があります。これは蠅のしぐさを一茶は、蠅が「打たないでくれ、助けてくれ」と「いのちごい」していると解説している本もあります。今回の子ども達の感性は、「なむなむしている」と捉え、死んだ蠅にも心を広げていて、子ども達の心の豊かさに触れることができました。



タッピングの森で捕まえた沢かきに見つめる目 (30.9.19)

子どもの遊び・生活から

お泊り会を終えて

Aクラス 瀧山 茉保



一学期最大のイベントであるお泊り会が行われました。体調不良の子どもも多く、全員が万全の体調での参加とはなりませんでしたが、大好きなお家の人から離れ、みんなで泊まった経験は一人ひとりのたくさんの成長が見られたように感じています。

お泊り会の前は、グループの名前を決めたり、お泊り会で使用する食材を買いに行くなど、グループの友達で話し合いをする場面が多くありました。話し合いや準備を進めていくうちに、子ども達はお泊り会への期待やみんなで話し合いをしながらか決めていく楽しさを感じているようでした。時には自分の意見が通らなかつたり、自分がやってみたかったことができなかつたりすることもありました。ですが、自分で乗り越え気持ちを切り替えていこうとする姿には、子ども達の成長を感じていま



みんなで作ると美味しいね

す。

そして、お泊り会当日。お泊りをするのに大興奮でテンションが高い子どもや、ちよつぷり不安があつて表情の固い子など、たくさんさんの想いを抱えての登園でした。不安に思っていた子も、楽しい活動を経験するうちに表情が和んでいきました。朝になると、最初の不安はどこかに飛んでいき、全員がどこか強くなつたような、自信に溢れた表情に変わつていました。自分で頑張れた経験や、ク

ラスの友達も一緒だつたことが子ども達の自信につながつたのだと思います。これからも、Aクラスみんなでの楽しい活動が続きます。たくさんさんの経験を自信につなげる姿をこれからも見守つていきたいと思つています。

みんなよく頑張りました!

Bクラス 竹岡 真美

8月末、みんなに運動会の話をする「イエーイー」と大喜びで、当日を楽しみにしながら練習や準備に取り組みました。

今年のBCリズムでは、元気いっぱいみんなにびつたりの曲『やってみよう』を踊ることになりました。一つ小さいCクラスさんと一緒に踊るので、『お兄さん・お姉さんとしてお手本になるように元気に踊ろう!』ということので頑張りました。お家で自主練習に励んでいた子もいたようです。

開会式練習ではAクラスさんの姿を見て憧れもあつたようで、お部屋に戻つてから開会宣言を言つている子がいたり、応援団の手振りを真似する子達もいました。また、バレー練習をベランダから見て、大きく膨らむと歓声を挙げ

たり、「サーカスみたいー!」「ぼくたちもやってみたいね」という声もありました。運動会の取り組みを通して、Aクラスさんの素敵な姿をたくさん見せてもらい、刺激になつたと思います。

そして迎えた当日。園庭よりかなり長い距離のかけっこを一生懸命走る姿、元気に「やってみよう!」と声を出しながら踊る姿、親子競技でお家の人におんぶしてもらつたり手を繋いで一緒に走つたりして嬉しそうな姿から、みんなの良い表情をたくさん見せてもらいました。白熱したお母さん達の綱引きの後には、負けた悔しさから泣いている子達もいて、何事にも本気の姿でした。

練習も本番もみんなよく頑張りました!来年はAクラスとして取り組む運動会。楽しみです。

運動会を終えて・・・

C2クラス担任 村松 千尋

Cクラスになつて、初めての大きな行事である運動会。「運動会って何だろう?」と思つていた子ども達も、練習を重ねるごとに本番を心待ちにする様子が伝わってきました。



バツタジャンプ☆

なかでも子ども達が一番楽しみにしていたのが、親子競技『バツタ探検隊☆』です。この競技は、夏にクラスで飼っていたバツタと子ども達の微笑ましい姿から内容を考えたものです。初めてのバツタとの触れ合いに、ちよっぴりドキドキしていた子ども達も「何を食べるのかな？」と給食のデザートで出た果物を分けてあげたり、飼育ケースから脱走してしまった時などは、バツタのお面を付けて仲間(!?)になって探したり。この出来事から、バツタごっこ・虫の観察など、遊びも広がっていました。運動会当日は大好きなお

泣き声の大合唱からスタートして6カ月、おんぶや抱っこで過ごしていた頃が懐かしく思えます。今では、登園するとすぐに子ども達はお気に入りの玩具を見つけ遊びだしています。また友達の名前を覚えて、気にしながら遊んでいる姿もあり、同じ遊びをしたくて

日々の成長

つほみクラス 齋藤 由紀乃



父さん、お母さんと一緒にバツタになりきって、ジャンプやフルーツ運び・・・ゴールした後は「楽しかった!」とキラキラの笑顔が見られました。長い距離のかけっこも、Bクラスさんとのダンスも、初めての経験だった子ども達。普段とは違う環境で不安や緊張もあった中、それでも最後まで頑張ったこと、家族や友だちから応援してもらったこと、何より楽しんで参加できたことは、きっと子ども達の力になり、これからの育ちにつながっていくでしょう。今後も、たくさんの経験・挑戦をしていく子ども達の応援団として、成長を見守り、支えていきたいと思えます。

物の取り合いが起ころうにもなっています。取られて泣く姿、一緒に遊べて嬉しい表情、友達との遊びが子ども達にとつて成長であり学びにつながることを日々感じています。最近では「自分で!」の気持ちが出てきている子ども達は、コップを自分で片付けたり、ズボンやパンツの着脱や手洗いも保育教諭と一緒に何回も挑戦しています。出来た時の嬉しそうな表情や気持ちをお大切にしていきたいと思えます。夏も終わりましたが、保育部では今でも山車の太鼓やさんさ踊りブームが続いています。手作りのさんさ太鼓を首から下げ、両手にばちを持って叩きながら「はらはらはらせ」と保育室を踊り歩いています。子ども達の実践は大きく、太鼓を保育教諭に渡してやりたいことを教えてくれたり、「たいこやりたい!」と言葉で伝える子もいます。子ども達の「〜をしたい」と思う気持ちを大切に受け止めたいと思います。これからも、園生活での子ども達一人一人の成長を支援していきたいと思っています。

編集後記

猛暑と言われた今年の夏でしたが、いつしか園庭にはたくさんのトンボが舞い、秋が訪れました。子ども達にとって日々の生活はもちろんのこと、いろいろな行事を経験することは多くの学びがあります。そしていろいろな場面で成長した姿を見せています。

先日の運動会で年長児は競技の他に一人一役の大事な役がありました。前日までとは違う雰囲気「緊張する」と言う言葉が聞かれましたが堂々と自分の役割をしっかりとこなしていた子ども達。その姿はやり切った達成感や満足感に満ちていました。この一瞬一瞬のキラキラした子ども達の輝きはこれからの成長に大きく自信となっていくものでしょう。保護者の皆様にはいろいろな場面でご協力を頂きましたことを感謝申し上げます。



学校法人 内丸学園
幼保連携型認定こども園
盛岡幼稚園
〒020-0002
盛岡市中央通一六―四七
TEL 六三二―二三〇一
理事長 坂本 洋